

ほっけきょう  
 仏教入門④ 『法華経』とは何ぞや！  
 —なぜ「経王」と呼ばれるのか—



仏教の日本への伝来は6世紀の飛鳥時代にさかのぼる。大乘仏教が中国・韓国(百済)を経て伝来し、各宗派に分かれた。現在にも伝わる宗派は主に平安二宗といわれる真言宗・天台宗から独立していった宗派と鎌倉時代に伝わった禅を受け継ぐ宗派とに分かれる。法華経は大乗仏教の代表的な経典であり仏教の伝来とともに日本に伝わった。聖徳太子が注釈書『法華義疏』を著し、最澄・日蓮など多くの開祖を通じて日本の仏教に大きな影響力を与えている。

石原慎太郎の『法華経』

A 「法華経を生きる」 石原慎太郎 1997-1998 年間プレジデント掲載

B 新解釈現代語訳「法華経」 令和2年7月発行(幻冬舎単行本) 石原慎太郎 (著) 形式: Kindle 版

- ① 仏教以外に本来の哲学を説いた宗教はない、哲学とは存在論と時間論とを考える学問です。
- ② 法華経だけが、生きている間に自分自身で己れを救う術を説いているのです。
- ③ 10の要因: 「十如是」: 相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等

ものごとの本質はこのようなものだという、世の中の現象について理解のための、分析論である。

『法華経』 中村元

中村 元 なかむら はじめ 1912 - 1999、東京大学名誉教授、日本のインド哲学者、日本の仏教学者の第一人者、東洋思想の世界的権威、島根県「中村元記念館」

中村元博士は、迹門全体としては(法華経の前半)いかなる体系的な抽象的哲学的思索も認められず、ただ仏の諸々の教法が一乗に帰するということが、豊富な言辞と多様な比喩とを以って繰り返し説かれているだけである、したがってその中には何らのある特殊な哲学体系を求めるならば何ものも得られないであろう、しかしながら我々は、法華経が特殊な哲学を述べていないという点に、かえってこの経典の重大な哲学的な立場を読み取ることができると、述べている。

## 『法華経』とは

『法華経』(ほけきょう、ほっけきょう)は、**大乘仏教**の代表的な**経典**。大乘仏教の初期に成立した経典であり、**誰もが平等に成仏できるという仏教思想の原点が説かれている<sup>[1]</sup>**。聖徳太子の時代に仏教とともに日本に伝来した。

『サッドルマ・プンダリーカ・スートラ』「正しい教えである白い蓮の花の経典」の意の漢訳での総称であり、梵語(サンスクリット)原題の意味は、「サツ」(sad)が「正しい」「不思議な」「優れた」、「ダルマ」(dharma)が「法」、「プンダリーカ」(punḍarīka)が「清浄な白い蓮華」、「スートラ」(sūtra)が「たて糸：経」であるが、漢訳に当たってこのうちの「白」だけが省略されて、例えば鳩摩羅什訳では『妙法蓮華経』となった。『ウィキペディア (wikipedia)』

日蓮聖人は、この法華経を『一部八卷二十八品 六万九千三百八十四文字』と云われ、法華経は、八巻で二十八章からなって総文字数が69384文字あると云われています。ただし、近年はこの文字数が少し多いようです。

この数字を「ろくまんくせんさんぱっし」と覚えさせられた記憶があります。 By 妙法寺住職 法華経 法話 2012/04/06

### ――― 仏教ウェブ入門講座から抜粋 ―――

【法華経は何が第一なのか?】 『法華経』には、諸経の王と説かれ、第一であることが繰り返されています。では、何が諸教の王であり、第一なのかというと、「この『法華経』は最もこれ難信難解なり」(法師品第十)とあるように、難信難解第一です。『法華経』は、「誰でも仏に成れる」と説かれ、そのすばらしい功德や、『法華経』を授受、書写、修行することの功德などが説かれていますが、「どうしたら仏になれるのか」という大切なことが明示されていません。そこにこの『法華経』の難信難解の理由があります。

【題目を唱えれば成仏できるのでは?】 『法華経』には、どうすれば仏のさとりを得られるのか説かれていないので、日蓮は、南無妙法蓮華経という題目を唱えれば成仏できるのだと「唱題成仏(しょうだいじょうぶつ)」を創出しました。ところが、『法華経』にその根拠はありません。一切経七千余巻のすべてのお経を調べても「南無妙法蓮華経」という言葉も見当たりません。

日蓮の造語なのです。

【般若心経と法華経の違いとは?】 般若心経では、人生は無常であるとして、物事にとらわれる事の愚かさを強調し、人生を看破する知恵を教えている。 いっぽう法華経では、人生とは、単なる一過性の無常のものではなく、生物の生死の奥には久遠の命が潜んでいると教えている。 また、法華経は実践を強調する。特に他人に尽くす実践の重要性を教えています。

【般若心経を唱えない日蓮宗では?】 理由は法華経こそ真実の教えであって、他の経典は法華経へ導くための方便の教えととらえるからです。最高の教えがあるのに、わざわざ違う教典を今更拝読し書写する事は意味がないという事からでしょう。このように決して般若心経を否定しているのではなく、教義上用いる必要が無いという立場から、拝読や写経をしないのです。

### ――― 関谷の理解の総括 ―――

1. 釈迦の原始仏教を乗り越えて発展させ、仏の世界(大宇宙)のイメージを創作したドラマチックな作品である、もって、衆生は想像の世界を描くことができ、信仰の世界に入ることができるとする。
2. 対機説法つまり比喻及び方便(手段)を駆使して、誰にでもわかるように、論理的な展開を構築して、仏を説いている。  
石原慎太郎いわく「法華経には、存在論と時間論に基づいた哲学がある」
3. ただし、どうすれば仏のさとりを得られるのか説かれていない・・・ノウハウ論でないから難信難解なのです。
4. いろいろの役割をもったキャラクターの登場する「**壮大な構想の神話**」の世界を展開することによって、誰もが平等に成仏できるという、すべてのものが仏になる(悟りを開く)素質を持っているという、大乘仏教の原点を示した。
5. 日本人いや東洋思想のDNAとなって根付いているのだから、「インド哲学は偉い」、スゴイと思う。

### ――― 【創価学会で見る法華経】 ―――

新興宗教では、法華経を根本経典とするところが多い。

- ① [久遠の救済という概念]
- ② [地涌菩薩という概念]
- ③ 「諸法実相」は、現実改革の原理である
- ④ 「方便を駆使した人間教育である」
- ⑤ 「一切衆生への授記」これが広宣流布の心です

## 『法華経』28章の日本語訳 (佼成出版社) 277 ページ

1. 幕開けの章 (序品第1) 仏＝世尊＝釈迦仏の奇瑞→妙法蓮華を説く舞台設定。“白毫”
  2. 仏に向かったの歩み (方便品第2) 三乗方便一乗真実 「すべての人を対象とした教え」
  3. 三界は火宅なり (譬喩品第3) 「三車火宅」の譬え事例から、三乗方便一乗真実の説く
  4. 大乘に心向ける (信解品第4) 「長者窮子」の譬えから、小乗から大乘の大宝を説く
  5. 草いろいろ (薬草喩品第5) 「三草二木」雨雲が全世界を覆うがごとくに、一相・一味の教え
  6. 未来に対する保証 (授記品第6) 弟子に未来世の記を授ける (仏に成る保証)
  7. 過去世の因縁 (化城喩品第7) 大通智勝如来は久遠の過去があった、一乗を説く。「化城宝処」
  8. 五百人への授記 (五百弟子授記品第8) 「衣裏繫珠」の譬喩に仮託して述べる。
  9. まだ未熟でも (授学無学人記品第9) 阿難と羅睺羅及び声聞の弟子 2000 人に“授記”する。
  10. 法華経を説く心構え (法師品第10) に対して法華経の地位を「高原穿鑿」の譬えで説く
  11. 「**多宝塔の出現**」 (見宝塔品第11) ラマチックな場面の始まり、“二如来 (二世尊) 並座”
  12. あらゆる人の成仏 (提婆達多品第12) 提婆の因縁譚と“竜女”の成仏 0
  13. 法華経を説き弘める (勸持品第13) 大勢の菩薩たちのちの悪世に「00000000000 不惜身命」の誓い
  14. 安楽な生き方 (安樂行品第14) 法華経は隠された奥義である、転輪聖王の「髻中明珠」の譬え
  15. 大地から出現した菩薩たち (従地涌出品第15) 娑婆世界の下方にひろがる虚空に住し菩薩 “**地涌の菩薩**”  
※世尊が仏となって、それほど長い時間がたってないのに、これほどの功德ある仕事なされたのか？
  16. 「**仏の寿命**」 (如来寿量品第16) 無量無辺の世界、入滅も方便、「良医病子」の譬え、
  17. 功德の大きさ (分別功德品第17) 法華経典を誦読し受持する功德は“無量無辺”
  18. 信仰の喜び (随喜功德品第18) 法華経典を“聴聞”するだけで功德は無量無辺
  19. 法華経を学ぶ功德 (法師功德品第19) 眼・耳・鼻・舌・身・意が“清浄”になる功德
  20. **すべての人を拝む (常不軽菩薩品第20) すべての人に軽んじず“礼拝”して授記を与える仏**
  21. 如来の超能力 (如来神力品第21) 百千万億兆劫にわたる“神通力”でもって説き明かせない法華経
  22. 菩薩たちへの委嘱 (嘱累品第22) 一心に“**広宣流布**”して衆生を利益せよ
  23. 薬王菩薩の事例 (薬王菩薩本事品第23) 自分の身を燃やして供養、身を捨てて布施すること。  
※仏はこれ諸法の王であるように、この経もまたそのようである、諸経の中の王なのだ。
  24. 妙音菩薩の章 (妙音菩薩品第24) 教える相手に応じて“変化身”を表わして法華経を説く
  25. 観世音菩薩の章 (観世音菩薩普門品第25) 名を称える音声を観じて苦からすべてを救う**観音力**
  26. 霊力のある言葉 (陀羅尼品第26) “呪文”を説いて、守護して福德を得る
  27. 妙莊嚴王の事例 (妙莊嚴王本事品第27) 妙莊嚴王が出家し菩薩になる“プロセス”、因縁譚
  28. 普賢菩薩の章 (普賢菩薩勸発品第28) 法華経を習得する条件、“**六牙の白象**”の誓い
- <最終節>①**仏が法華経を説かれたとき**、ガンジス河の砂に等しい無量無辺の菩薩は、衆生を教化する力を得、また三千大千世界を微塵に砕いた数ほどの無数の菩薩が、普賢菩薩と同じ実践力を得た。
- ②普賢菩薩をはじめとするもろもろの菩薩たちと、舍利弗をはじめとするもろもろの声聞、そして天・竜といった人間にあらざる衆生の全員が大いに歓喜し、仏の言葉を胸に刻みつつ、拝礼をして去っていった。
- 備考：仏・如来・世尊 (変化身) 日月燈明如来・大通智勝如来・釈迦牟尼仏・**常不軽菩薩**・雲雷音宿王華如来 etc  
法華経：過去・現在・未来の諸仏が最終的に教えたかった宇宙の真理、宇宙の真理であるから、それを言葉でもって説くには無限の時間がかかる、法華経という経典は法華経がそのような宇宙の真理であることを説いたもの。
- 以上

『法華経』 久遠の救い NHKライブラリー  
立正大学学長・渡辺宝陽・1933 生

すべての仏道修行者が菩薩であることにめざめさせようとす  
る法華経、その信仰と思想の雄大な世界を、あますところなく丹  
念に説き明かす。斯界の第一人者として、鋭い着想と深い信仰  
からあふれる経典の解説は、他の追隨を許さない。

はじめに 法華経は日本人に親しい経典である。おそらく過半数の日本人がそのおしえに接していることであろう。鶯ウ  
グイスの鳴き声が「**ホーホケキョー**」と聞こえるというのも、江戸時代に法華経が隆盛であったところから来ている。法  
華経はインドで結集され、はじめはサンスクリットによって記録された、とくに鳩摩羅什(344-413)が漢訳した「妙法蓮華経」  
が大いに流布した。わが国では、聖徳太子(574-622)の「法華義疏」など、中央アジアから中国・朝鮮・日本などにおける翻  
訳著作は膨大なものがある。したがって、法華経をどう読むかということは、日本仏教史上の大きな論点となった……

ex **法然上人**(源空 1133-1212)は法華経は上根上機、すなわち修練を積んだすぐれた機根の修行者にして理解のできる経  
典であるとした。そこから、末法の人間にはいささか縁の遠いおしえであると位置付けた。そうした理解に対して**日蓮聖人**  
(1222-82)は法華経を何度も何度も読み返し、なるほどはじめから読めばそのような解釈にもなるが、しかしすぐれた機根  
の声聞たちが菩薩の道を歩むことになる前と後半で強調するのは、実はそれを通じて仏陀みほとけ入滅後、末法の人々の救い  
を顕わすためであることを明らかにした。しかもそれは「逆読法華」という表現で語られている。

## プロローグ

1. 法華経のかたち
2. 経典の特色
3. 経典の構成

### 第一章 霊鷲山に輝く（序品第一）

1. 釈尊、白毫より大いなる光を照らす
2. 時空を越えた救いの光

### 第二章 比喻によって法華経の心を明かす（方便品第二）

1. 「諸法実相」とは
2. 真実のすがた
3. 一大事の因縁
4. 巧みなる仏陀のおしえ

### 第三章 比喻の心を「法華七喻」に聴く

1. 「三界は火宅」なり・・・三車火宅喻
2. 父子のきずな・・・長者窮子喻
3. 一雨にして平等なり・・・薬草喻
4. まぼろしの城・・・化城宝处喻
5. 縫い込まれていた宝珠・・・衣裏繫珠喻
6. 髻中明珠の喩え・・・髻中明珠喻
7. 良医と狂子の喩え・・・良医治子喻
8. 未来成仏の保証を願う・・・授記品第十六の願い

### 第四章 仏道修行のゆかり

### 第五章 おしえを生きる

### 第六章 菩薩の誓い

### 第七章 久遠の救い

### 第八章 久遠の救いを信じる功德

### 第九章 末世の仏道実践

### 第十章 諸菩薩の行者守護の誓い

## 『諸法実相 しょほうじっそう』とは

仏陀の〈さとり〉の世界から見た森羅万象の真実のすがたという意。諸法とはあらゆる存在、**実相**とはありのままの真実のすがたのこと。《法華経》の**方便品**（ほうべんぼん）には、この実相の世界は**仏陀**の知見したもう**ところ**（**仏知見**）によってすべて絶対平等である真実のすがたが照らし出されると説かれる。諸法実相は**大乘仏教**の根本思想として重視されるが、そのとらえ方には発展が見られる。（世界大百科事典）

## 『久遠実成 くおんじっじょう』とは

法華経の教えにおいて、釈迦は30歳で悟りを開いたのではなく永遠の過去から仏（悟りを開いた者）となっていたが、**輪廻転生**を繰り返した後について釈迦として誕生して悟りを開くという一連の姿を敢えて示したという考え方。「久遠」とは、漢語で「永遠」を意味する言葉で、時間が無窮であること。（ウィキペディア）

## エピローグ

最初に釈尊が霊鷲山りょうじゆせんで多くの仏道修行者に囲まれているとき、不思議な光景が展開するところからはじまって、前半の「諸法実相しょほうじっそう」の世界が開示される。その上、これまで真の仏道成就の約束が示されていなかった直弟子たちやすぐれた人々への励ましや将来成仏将来成仏しょうらいじょうぶつの保証などが展開され、それを求めていく菩薩道のすがたが示されていった。さらに後半に入って、突然大地が震裂して六万恒河沙ろくまんごうがしやの久遠の本弟子たち（本化地涌ほんげじゆの菩薩）が出現し、このことを機縁として釈尊の久遠の教化（久遠実成くおんじっじょう）が示され、そのおしえにめざめることの尊さ・それに随喜すること・信の重要性などが明らかにされてきた。そうして、薬王菩薩本事品第23以降は、これらの教えを聞き、遙か彼方かなたの世界からよるこびにあふれて娑婆世界の霊鷲山に來詣した諸菩薩が、法華経に集約される仏陀みほとけの教えに感激し、後々の悪世になろうとも持経者（法師）を守護し、永遠に法華経のおしえがすべての世界に伝わり、人々が平和な世界に住し、かつ菩薩道を求めつづける志ある人生を営むように守護することを約束して、この法華経八卷二十八品の教説が結ばれるのである。思えば、最初に文殊師利菩薩が弥勒菩薩に質問したことから法華経が展開され、やがて最後に普賢菩薩の誓いで終わっているが、法華経以前の大乗仏教ではこの二人の菩薩が釈尊に随侍している脇侍である。二人の菩薩は文殊菩薩が智慧を、普賢菩薩が理法をあらわし、両者が打ちそろって理智不二りちふにをあらわすものとされる。法華経の最初と最後に二人の菩薩が登場するのは、まさに法華経が理智不二のおしえであることを示すという解釈もある。木像や画像で普賢菩薩が馬に乗り、文殊菩薩が獅子に乗って一対として祀られているのはそうしたことをあらわすものである。

思い巡らすと、法華経の説法の際は霊鷲山の不思議な光景からはじまり、途中で多宝塔が出現する見宝塔品第11から鑱累品第22までは虚空に説法の間が遷り、さらに再び地上に戻って説法が終わる。こうしてみると、このような構成自体に、法華経が宇宙大的な空間の中で人間を考え、おしえの道を探求している壮大な構想が基本になっていることを、あらためて知る思いがする。

——結——

## ——蓮華(蓮の花)はインドでは特別な花——仏教のシンボル——

「**蓮華の水に在るが如し**」蓮華が水に生じ、しかも水に汚されないように・・・「善く菩薩の道を学びて、世間の法に染まらざること、蓮華の水に在るが如し、地より湧出して、皆、恭敬の心を起し、世尊の前に住せり」と**法華経の從地湧出品**にあります。菩薩のあり方の根本に触れたもので、ここで世間というのは、かぎりのある汚れた私どもの経験的な現実世界のことであり、世間の法というのはそういう経験世界の在り方を示していると解してよい、そしてそれは池の泥水に譬えられる。菩薩はそのような世間に生ずるというのです、このことは菩薩がかぎりのあるよごれのある現実社会を離れては存在しない、あるいは存在しえないことを意味している、それはあたかも蓮華が水の中であってこそ、それらしくありうるものであり、その中に生じてこそ蓮華でありうるのに似ています。そしてあたかも水に生じた蓮華が水に汚されないのに似ている、**菩薩行の実践が蓮華の如くである**といわれる所以はこの点にあると申せましょう。

## 『法華七喻』の紹介①「三車火宅」の比喻

ある時、**長者**の邸宅が火事になった。中にいた子供たちは遊びに夢中で火事に気づかず、長者が説得するも外に出ようとしなかった。そこで長者は子供たちが欲しがっていた「羊の車(ようしゃ)と鹿の車(ろくしゃ)と牛車(ごしゃ)の三車が門の外にあるぞ」といって、子供たちを導き出した。その後さらに立派な大白牛車(だいびやくごしゃ)を与えた。この物語の長者は仏で、**火宅は苦しみの多い三界**、子供たちは三界にいる一切の衆生、羊車・鹿車・牛車の三車とは**声聞・縁覚・菩薩**(三乗)のために説いた**方便**の教えで、それら人々の**機根**(仏の教えを理解する素養や能力)を三乗の方便教で調整し、その後には大白牛車で**一乗**の教えを与えることを表している。なお**檀一雄**の「火宅の人」のタイトルは、この三車火宅を由来としている。

## 『法華七喻』の紹介②「化城宝処」の比喻

宝のある場所(宝処)に向かって五百由旬という遥かな遠路を旅する多くの人々がいた。しかし険しく厳しい道が続いたので、皆が疲れて止まった。その中に一人の導師がおり、三百由旬をすぎた処で方便力をもって**幻の城を化現させ**、そこで人々を休息させて疲れを癒した。人々がそこで満足しているのを見て、導師はこれは仮の城であることを教えて、そして再び宝処に向かって出発し、ついに人々を真の宝処に導いた。この物語の導師は仏で、旅をする人々は一切衆生、五百由旬の道のりは仏道修行の厳しさや困難、化城は二乗の悟り、宝処は一乗の悟りであり、仏の化導によって二乗がその悟りに満足せずに仏道修行を続けて、一乗の境界に至らしめることを説いている。法華経では、遥か昔の**大通智勝如来**が出世された時、仏法を信じられず信心を止めようと思った人々が、再び釈迦仏の時代に生まれて仏に見(まみ)え、四十余年の間、様々な教えを説いて仮の悟りを示し理解して、また修行により真の宝である一乗の教えに到達させることを表している。

## 『法華七喻』の紹介③「三草二木」の比喻

大地に生える草木は、それぞれの種類や大小によって異なるが、大雲が起こり雨が降り注がれると、**すべての草木は平等に潤う**。この説話の大雲とは仏で、雨とは教え、小草とは人間や天上の神々、中草とは声聞・縁覚の**二乗**、上草とは二乗の教えを通過した菩薩、小樹とは大乘の教えを理解した菩薩、大樹とは**大乘**の教えの奥義を理解した菩薩であり、それら衆生は各自の機根に応じて一乗の教えを二にも三にも聞くが、仏は大慈悲をもって一味(一乗の異名)実相の教えを衆生に与え、利益で潤したことを例えた。

### 公開講座『法華経』漢訳仏典を読む 龍谷大学非常勤講師 村上明也

四天王寺大学非常勤講師・中央仏教学院講師  
紅葉の永観堂(浄土宗禅林寺)の僧侶でもある。  
(注)コロナ禍で公開講座も1年間休講となった・・・関谷。

**三乗方便一乗真実** 仏教とは、仏に成る教えです、仏の教えのことを乗(乗り物)と表現する。3つの乗り物は方便であって、本当は皆、一つの乗物に乗っているのですよ、これが真実です。一仏乗とは、仏となることのできる唯一の教えのこと、法華一乗。

- ① 声聞(しょうもん)(乗): 仏の声を聞いて修行する者 → 阿羅漢(あらかん)
- ② 縁覚(えんがく)(独覚)(乗): 独力で因縁を悟る者、孤独を好む、説法教化をしない → 辟支仏(びやくしぶつ) 音写
- ③ 菩薩(ぼさつ)(乗): 衆生を導き仏道を成就させようとする行者、自利+利他、ボダイサツタの音写

**仏知見(ぶつちけん)** (仏の智慧)を開き示し悟らせ入らせること、換言すると、一切衆生、すなわち、すべての生きとし生きるものを成仏させることであった。ここに始めて仏のこの世に出現する目的が開示された。

**法華経は仏と仏の教えを統一するという大きな特色を持った経典である。** スケールが大きい アウフヘーベンのお経といえる。

- ① 多宝塔を出現させ三変土田して、釈尊の分身仏を十方世界から集合させてみせる、仏の空間的統一といえる。
- ② 如来寿量品の久遠実成の思想は膨大な過去仏を釈尊一仏に統一するので、仏の時間的統一といえる。
- ③ 方便品の一仏乗の思想は、教えの統一を図ったものである。

**法華経信仰** 法華経を信仰する者の一般的な印象としては極端な場合は狂信的といわれるほどの実践性、行動性という特色が

ある。法華経を信仰するものは、過去世においてすでに最高の正しい悟りを完成したものであるが、衆生への**大慈悲心**から、あえてその清浄な業の果報を捨ててこの悪世に生まれて、法華経を説き広めるとされるのである。法華経を信仰する自己が現在どんなに恵まれない境遇におかれていても、それは自己の**大慈悲心**の故に、あえて恵まれた果報を捨てたからに他ならないのである。しがって自力によって自己の悟りを追求するのでもなく、他力によって絶対的救済者から救われるのを求めるのでもなく、自己の本地、すなわち、自己の過去世においてすでに悟りを開いた大菩薩であり、自ら選んでこの悪世にうまれ衆生のために法華経を説くべき存在であることを深く自覚してこの世における使命を實踐すればよいのである。**ここには宗教的にきわめて興味深い逆説が示されているといえよう。**

**仏十大弟子** 1. 舍利弗(しゃりほつ)(智慧第一) 2. 目犍連(もくけんれん)(神通第一) 3. 摩訶迦葉(まかかしよう)(頭陀第一) 4. 阿那律(あなりつ)(天眼第一) 5. 須菩提(しよぼだい)(解空第一) 6. 富楼那(ふるな)(説法第一) 7. 迦旃延(かせんねん)(論義第一) 8. 優婆離(うぱり)(持律第一) 9. 羅睺羅(らごら)(密行第一) 10. 阿難陀(あなんだ)(多聞第一)

## 創価学会における 『法華経』とは

### 創価学会 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

創価学会(そうかがっかい)は、日本の宗教法人である。法華経系の在家仏教の団体で、国内に公称 827 万世帯を擁する。1930 年(昭和 5 年)に創立。「創価」とは「価値創造」の意味。創価学会は価値の中心に「生命の尊厳」の確立を置き、それに基づいた「万人の幸福」と「世界の平和」の実現を目標としている。『聖教新聞』(日刊)、『創価新報』(月 2 回)、『大白蓮華』(月刊)などの機関紙誌を発行<sup>[SG 2]</sup>。1964 年(昭和 39 年)に結党された公明党の支持団体である。

#### 教義・理念

- ・仏法が説く生命尊厳の思想を根本に、人類の幸福と社会の繁栄、世界平和の実現を目指す「[広宣流布](#)」という運動を実践する。
- ・万人の生命に等しく内在する、智慧と慈悲と勇氣に満ちた仏の生命を最大に発揮する「人間革命」を信仰の指標とする。

#### 経典 『法華経』、『新編日蓮大聖人御書全集』(創価学会版)

**勤行** 仏壇に御安置してある御本尊に向かい『法華経二十八品』のうち、「法華経方便品第二」の冒頭から十如是まで(十如是は三回唱える)、続いて「法華経如来寿量品第十六」の自我偈を誦読ののち、各御記念文を御祈念し、「南無妙法蓮華経」と題目を三回唱えた後、勤行を終える。日々、朝と夕(夜)の 2 回行う。

**池田 大作**(いけだ だいさく、1928 年 1 月 2 日 - )は、日本の宗教家、作家。宗教法人・創価学会の名誉会長、SGI(創価学会インタナショナル)会長。山本 伸一(やまもと しんいち)、**法悟空**のペンネームで作家活動もしている。

『創価学会』毎日新聞社出版 第1刷 2018 年 定価 1480 円 P413

著者・ジャーナリスト・田原総一郎・1934 生まれ

ご近所の創価学会の方が「読みませんか」と持ってこられた本です。ただし私は学会員ではない。

この著書より、法華経及び仏教に関連する用語について25項目を抜粋しました・・・関谷

※	用語	法華経	学会	解説
1	三障四魔さんしやうしま	○		正法を行わずに、阻もうとして起こる働き
2	地涌じゆの菩薩	○		法華経を広めるため、大地の底から呼び出した菩薩
3	方便品ほうべんほん第 2 章	○		誰もが仏になることができるという法理が説かれている
4	寿量品じゆりやうほん第 16 章	○		仏の生命の永遠性という法理が説かれている
5	王仏冥合おうぶつみやうごう	○		王法と仏法が冥合すること、奥底で合致すること
6	南無妙法蓮華経		○	日蓮聖人の造語・本門の本尊
7	十界論じっかいろん	△	○	仏法では命の境涯(生命状態)を10種類に分類している
8	一念三千	△	○	一念の生命に三千の事象が具わっている
9	宿命転換	△	○	過去の重い宿命を幸福の方向に転換できるとした
10	煩惱即菩薩	△	○	マイナスを否定するのではなく、プラスに転化できるとした
11	三世さんぜの生命	△	○	生命は永遠である
12	願兼於業がんけんおごう	△	○	「願、業を兼ねる」宿命を使命に変える
13	一生成仏	△	○	誰もが一生のうちに成仏できる
14	広宣流布	△	○	仏法の教えを広く流布する
15	日蓮仏法		○	末法の御本仏
16	勤行唱題こんぎやうしやうだい	△	○	題目を唱えてお勤めをすること
17	政教一致		○	憲法20条「政教分離の原則」は政治活動制限ではない
18	折伏弘教しゃくぶくぎやう		○	教えを広めること
19	母性原理		○	時代転換のカギ、母性は慈悲、婦人部が活動の担い手
20	友人葬		○	葬式仏教からの脱皮
21	生命哲学		○	仏とは生命なんだ!
22	人間革命		○	池田大作の小説
23	法悟空		○	池田大作のペンネーム
24	池田大作		○	第三代会長 50 年
25	日蓮正宗		×	宗門 VS 信徒団体→平成3年決別

三つ『偈』の比較	出典	あらすじ フリー百科事典ウィキペディア
2019「歎異抄を読む」 <b>正信偈</b> しょうしんげ 840文字 帰命無量寿如来	13世紀 正信念仏偈という、 親鸞の著書『教行信証』のなかの 真宗の要義大綱をまとめた偈文。	大きく二つの部分によって構成されている。前半は『仏説無量寿経』に依って明らかにされている。浄土往生の正因は信心であり、念仏は報恩行であることを説明し讃嘆している。後半の部分は、インド・中国・日本でこの教えを正しく伝えた七高僧の業績・徳を讃嘆している。
2020「般若心経の謎を解く」 <b>般若心経</b> 262文字 観自在菩薩	膨大なる般若経典 BC1～2世紀	大乘仏教の空・般若思想を説いた経典で、般若経の1つ。僅か300字足らずの本文に大乘仏教の心髄が説かれているとされ、複数の宗派において読誦経典の一つとして広く用いられている。
2021「法華経とは何ぞや！」 <b>自我偈</b> じがげ 510文字 自我得仏来	妙法蓮華経 BC1～2世紀 如来寿量品第十六の偈文(詩句)が「自我得仏来」の言葉からはじまるので、「自我偈」という。	法華経の中心内容を説きあかし、すべての経典の眼目とされている。釈迦牟尼仏の命は永遠であることが語られ、仏は迷い苦しむ人びとに死を示して人びとの心を目覚めさせることにより仏の道を歩むよう説いている。また、いついかなる人びとを仏にするのが、仏の誓願であることがしめされている。私たちをつねに変わることなく救い導いてくださる仏の大きな慈悲の心にふれ、仏の願いにこたえて一心に信仰にはげむことを誓いながら、この経文を読誦すること。



### 自我偈（じがげ）（法華経寿量品第16）

『妙法蓮華経』の第16「如来寿量品」は最初の一句が、「自我得仏来」ではじまっているために『自我偈』とも呼ばれています。ここでは、仏は人々を救済するために仮に地上に姿を現わされたが、本来は永遠の昔から悟りを開いており、この仏の命は永遠であるという立場が取られています。そしてその仏のことを、久遠実成（永遠の昔から仏となっている）の釈迦牟尼仏と呼んでいます。そのことについてのべているのが、この第16章です。この経典は日蓮宗や天台宗の葬儀などでも唱えられています。

●自我偈（漢文）

隨處所可度	以常見我故	實而言死	汝等有智者	久乃見仏者	諸有修功德	憂怖諸苦惱	諸天擊天鼓	我此土安穩	神通力如是	因其心恋慕	汝等不聞此	以方便力故	一心欲見仏	衆見我滅度	而美不滅度	今入於仏道	自我得仏来	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生
隨處所可度	以常見我故	實而言死	汝等有智者	久乃見仏者	諸有修功德	憂怖諸苦惱	諸天擊天鼓	我此土安穩	神通力如是	因其心恋慕	汝等不聞此	以方便力故	一心欲見仏	衆見我滅度	而美不滅度	今入於仏道	自我得仏来	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生
爲說種種法	而生憐愍心	無能說虛妄	勿於此生疑	爲說仏難値	柔和質直者	如是悉充滿	常作衆伎樂	天人常充滿	於阿僧祇劫	乃出爲說法	但謂我滅度	現有滅不滅	不自惜身命	廣供養舍利	當住此說法	爾衆無量劫	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生	
每自作是念	放捨著五欲	我亦爲世父	當斷令永盡	我智力如是	則皆見我身	是諸非衆生	雨曼荼羅華	闍林諸寶閣	常在靈鷲山	常在靈鷲山	我見諸衆生	余國有衆生	時我及衆僧	咸發憐愍心	我當住於此	爲度衆生故	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生	
以何令衆生	墮於惡道中	救諸苦患者	仏語實不虛	盡光照無量	在此而說法	以惡業因縁	散仏及大衆	種種寶莊嚴	及余諸住処	及余諸住処	沒在於苦海	恭敬信業者	俱出靈鷲山	而生渴仰心	以諸神通力	方便現衆衆	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生	
得入無上道	我常知衆生	爲凡夫顛倒	如醫善方便	壽命無數劫	救時爲此衆	過阿僧祇劫	我淨土不毀	寶樹多華果	衆生見劫尽	衆生見劫尽	故不爲現身	我復於彼中	我時語衆生	衆生既信伏	令顛倒衆生	方便現衆衆	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生	
速成就仏身	行追不行道	實在而言滅	爲治狂子故	久修業所得	説仏壽無量	不聞三寶名	而衆見燒盡	衆生所遊樂	衆生所遊樂	衆生所遊樂	令其諸渴仰	爲説無上法	當在此不滅	隣近而不見	隣近而不見	隣近而不見	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	當說法教化	無數億衆生	

### 意識

私が仏になってから経過した期間は、百千万億という長い時間です。その間に教えを説いて数限りない人々を教化し、仏の道に導いてきました。それから長い時間が経過しました。人々を救うために、一度は（釈迦として）死んだ姿をとりましたが、実際に死んだのではなく、常にこの世界にいて法を説いているのです。私は常にこの世に現れています。神通力によって迷っている人々には、姿を見せないようにしているのです。人々は私の死を見て、私の遺骨を供養し、私をなつかしく思い、慕い敬う心を起こしました。人々が信仰心を起こし、心が素直になり、仏に会いたいと願ひ、そのために命も惜しまないように、その時私は、弟子たちと靈鷲山に姿を現します。そして人々に語ります。「私は常にこの世界にあり、不滅ですが、人々を導く手段として死んでみせたのです」と。他の国土の人々も、私を信じ敬うならば、その人々のためにも、「私は最高の教えを説くでしょう」。あなたたちはこれを信ぜず、私が死んだと思っています。私がみるところ、人々は苦しみの中にあえいでいます。だから姿を現わず、すぐる心を起こさせたのですが、今私を仰ぐ心が起こったので、こうして姿を現し教えを説くのです。

私の神通力はこのようにすばらしく、永遠の昔から、常にここ靈鷲山や、またこの世界の場所にいます。人々がこの世が終わりを迎え、種々の災害が起こると思っているときでも、私の国土は安らかで天人や人々で一杯です。その世界の花園や宮殿は、種々な宝石で飾られ、木々には多くの花や実がなり、人々はそれを楽しんでいます。天人たちは天の楽器をならし、常に多くの音楽を演奏し、マンダラの花が、仏や人々の上に降り注いでいます。私の国土は不滅であるのに、人々はこの国土の終わりが迫って、あらゆる苦しみや悩みに溢れていると錯覚しています。罪を重ねてきた人々は、悪い行為の結果、どんな長い時が過ぎても、仏の教えを聞くことができませんが、善い行為をなし、心が素直な人々は、皆私の姿を見られますし、私の教えを聞くこともできます。こうした人々に、仏の寿命は永遠であると説き、やっと仏の姿を見ることができた者には、仏の姿を見るのは困難だと説きます。私の智慧の働きがこれほど優れ、その光はどこまでも照らし、寿命が永遠なのは、過去の長い間の修行の結果なのです。もしあなたたちに智慧があれば、私のいったことを疑ってはいけません。疑う心を完全になくして下さい。仏の言葉は常に真実です。例えば医者が、狂った子供たちを技法を以て救うために、生きていのに死んだと言ったのが嘘でなかったように、私も人々の父として、彼らの苦しみを救おうとしているのです。

人々は迷っているので、私が死んだと錯覚しています。私が常に姿を現わしていると、なまけ心を起こし、欲望に捕われて、悪世界に墮ちることになります。そこで私はいつも人々が、正しい道歩んでいるかを見極め、どうすれば救えるかを考えながら、ふさわしい教えを説いています。そして常に、「どうすれば人々を最高の教えに導き、一刻も早く仏に成るだろうか」と常に念じているのです。 Copyright (C) SEKISE, Inc.

○NHK テレビテキスト「100分 de 名著」法華経 2019年11月  
2019年10月25日発売 植木雅俊著（仏教思想研究家）

おもわく。

## 思想書として「法華経」を読む



古来、大乘仏典の中でも「諸経の王」と呼ばれ、広くアジア諸国で最も信奉されてきた経典の一つ「法華経」。説法、道元、日蓮、宮沢賢治ら多くの人々に巨大な影響を与えてきました。「今昔物語」「源氏物語」「枕草子」などの文字にも法華経にまつわるエピソードが記され、日本文化の底流には脈々とその精神が流れ続けています。しかし、現代人には、意外にその内容は知られていません。「100分 de 名著」では、この法華経のサンスクリット版の原典を「思想書」ととらえて解説し、一宗教書にはとどまらない普遍的なテーマや、私たちにも通じるメッセージを引き出していきます。「法華経」は西暦紀元1世紀末から3世紀始めに成立したと推定されています。当時のインドは、厳しい修行や哲学的な思索を出家者が中心になって行う「部派仏教」と呼ばれる教団が栄え、仏教が庶民の暮らしから遠い存在になっていました。そこに、広く民衆を救済しようという新たな潮流、大乘仏教が登場し、部派仏教との間で激しい対立が生じていました。この対立を乗り越え、これまでのさまざまな仏教をより大きな視点から統合しようとしたのが法華経だといいます。法華経の舞台は、霊鷲山というインドの山。釈迦の説法を聞こうと八万人にも及ぶ聴衆が集まっていた。深い瞑想の中にいた釈迦はおもむろに目覚め、今までに誰も聞いたことがない奥深い教えを語り始めます。全てのいのちの絶対的な平等性、これまで成仏できないとされてきた出家修行者や女人、悪人にいたるまでの成仏の可能性、それぞれの人間の中に秘められた尊厳性、それを尊重する行為のすばらしさなどが、卓抜な比喻などを駆使して語られます。そして、クライマックスでは、これまで秘されていた釈迦の成仏の本当の意味が明かされるのです。法華経には、忽然と虚空に出現する天文学的な大きさの宝塔、大地をわって湧き出してくる無数の菩薩たち等、神話的なシーンが数多く現れ、合理的な思考からすると一見荒唐無稽な物語とみなされがちです。しかし、当時の思想状況や社会状況に照らし合わせて読み解いていくと、当時の常識では到底受け入れられないような新しい考え方や価値観を、象徴的な出来事や巧みなたとえに託してなんとか表現しようとする作者たちの意図が明らかになっていきます。その一つひとつを解説すると、その中核には、「釈迦がもともと説こうとしていた仏教の原点にたちかえれ」という力強いメッセージがこめられていることがわかります。それは、さまざまな因習に縛られ見失われそうになっていた「人間自体を尊重する人間主義の思想」だと、仏教思想研究家の植木雅俊さんはいいます。排外主義が横行し分断される社会、拡大し続ける格差……憎しみや対立の連鎖からなかなか抜け出せない現代、「法華経」を現代的な視点から読み解きながら、「差異を認め合い、共存・融和を目指していく知恵」「自己に眠る大きな可能性を開いていくには何が必要か」など、生きる指針を4回にわたって学んでいきます。



思想として「法華経」を読む  
ゲスト講師：植木雅俊

### 第1回 全てのいのちは平等である

法華経が編纂された当時は、出家修行者が自らの悟りを目指す一部の「部派仏教」と広く民衆を救済しようという「大乘仏教」が厳しく対立していた時代だった。法華経にはそうした対立を止揚し乗り越えようという新しい思想がこめられているという。一部の部派仏教が決して成仏できないとした在家信者や女性も、初期大乘仏教が決して覚りを得ることができないと断じた出家修行者も、全て平等に仏になれるという平等思想を打ち出したのである。法華経ではそのことを過去の因縁話や有名な「三車火宅のたとえ」など卓抜な表現を用いて見事に説いた。第一回は、法華経にこめられた、人類初ともいえる「普遍的な平等思想」に迫る。

### 第2回 真の自己に目覚めよ

法華経が最も優れた経典とされる理由は「全ての人間が平等に成仏できる」と説いたこと。では「成仏する」とはどういうことか？それは現代の言葉でいえば「真の自己に目覚めること」「人格を完成させること」だと植木さんはいう。当時は釈迦が神格化され、釈迦の骨をおさめた塔「ストゥーパ」を拜む信仰が隆盛を極めていた。しかし、法華経では、釈迦はあくまで覚りを得たひとり人間なのだから、偶像を信仰するのではなく釈迦が説いた「法」や「経典」の方こそ重視せよと説く。それこそが人格を完成していく方途なのだ。第二回は、様々なたとえをもって語られる「真の自己に目覚めること」の大事さを解き明かす。

### 第3回 「永遠のブッダ」が示すもの

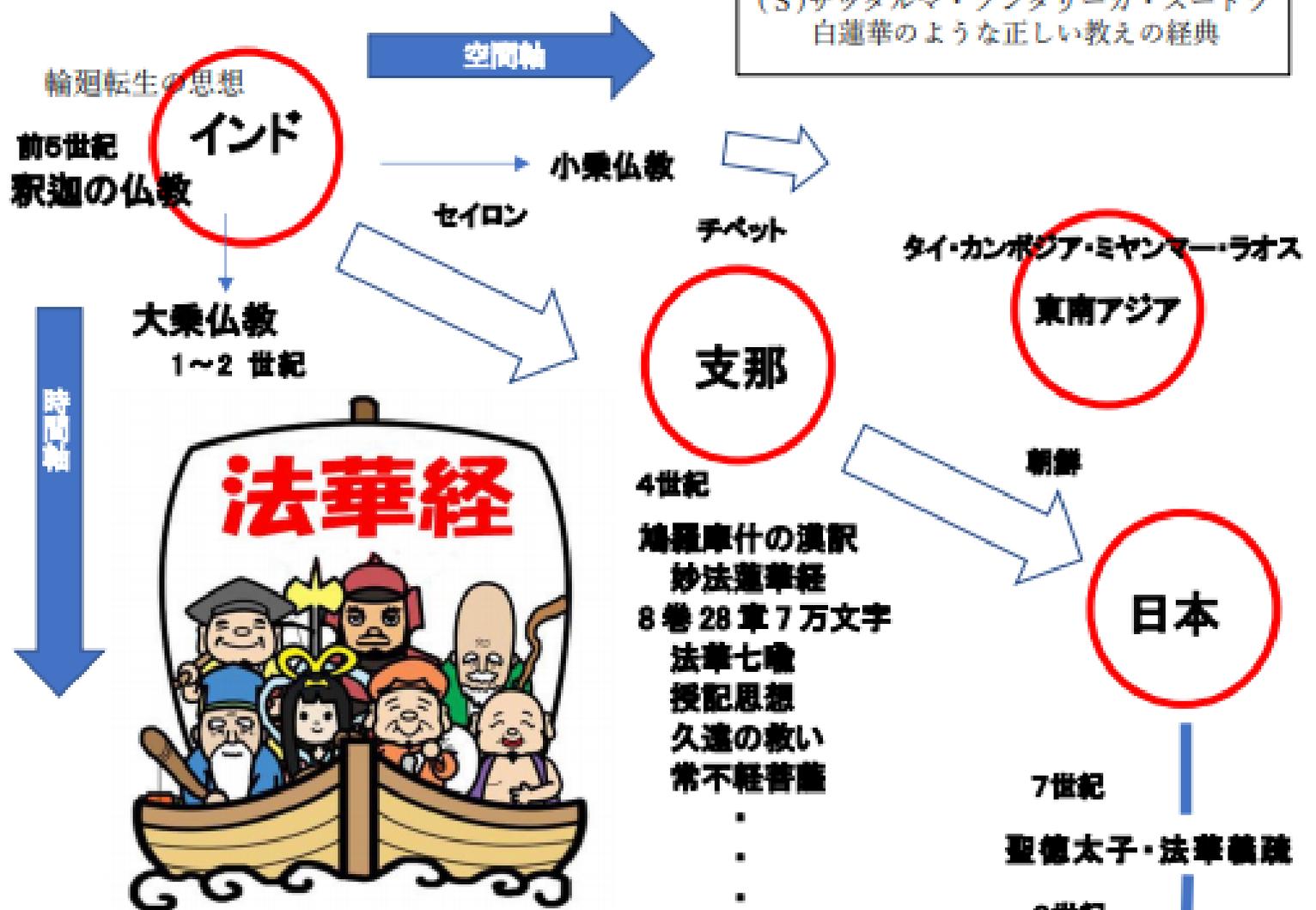
その場でたちどころに覚りを得る女性や悪人、大地の底から湧き出してくる菩薩たち……劇的なドラマが繰り広げられる法華経の中盤。神話的ともいえるこれらの表現は、これまでの常識的な価値観をゆさぶり、全く新しい価値観を受け入れる地ならしをしようとした表現だという。その上で明かされるのは、釈迦が四十年前数前にブッダガヤで成仏したのではなく、気の遠くなるようなはるか過去にすでに成仏していたという驚愕すべき事実。そこに込められているのは、様々な形で説かれてきた無数の仏たちを一つに統合し、釈迦という存在の中に位置づけることで、これまでの仏典全てを包摂しようという意図だという。第三回は、法華経に説かれた「永遠のブッダ」が示す奥深い意味を明らかにしていく。

### 第4回 「人間の尊厳」への讃歌

法華経後半で最も大事な章と考えられている「常不軽菩薩品」。どんな暴力や迫害にあおうとも、ひたすら他者に内在する仏性を尊重し礼拝し続ける常不軽菩薩が、経文などを全く読めずともやがて覚りを得ていくという姿を描いている。ここには、法華経の修行の根幹が凝縮しているという。すべての人間に秘められた可能性を信じ尊ぶ行為こそが、自らの可能性を開いていく鍵を握っているというのが法華経の思想なのだ。第四回は、歴史小説「等伯」を書いた直木賞作家の安部龍太郎さんとともに法華経を読み解き、理想の人間の生き方に迫っていく。

・・・以上で終わります・・・

**概念図（相関図）**  
 (S)サツダルマ・ブツダリーカ・スートラ  
 白蓮華のような正しい教えの經典



説くところ：

テーマ	① 三乗方便一乗真実 (唯一の教え) ② 諸法実相 (究極の真理) ③ 久遠実成 (仏=人間の永遠性) ④ 菩薩道 (実践の道)
-----	---

内容はと云うと：

- ① 大乘仏教の代表的な仏典である
- ② ブツダの变化身のドラマチックな物語である
- ③ 何回も何回も読み返すうちに解ってくるお経である

興味ある視点：

- ① 多宝塔の出現 地涌の菩薩 仏の寿命
- ② ガンジス河の砂→無量無辺百千万億那由他劫
- ③ 量子論と大乘仏教の宇宙観が類似している点